

神戸大学建築卒業設計賞 大賞

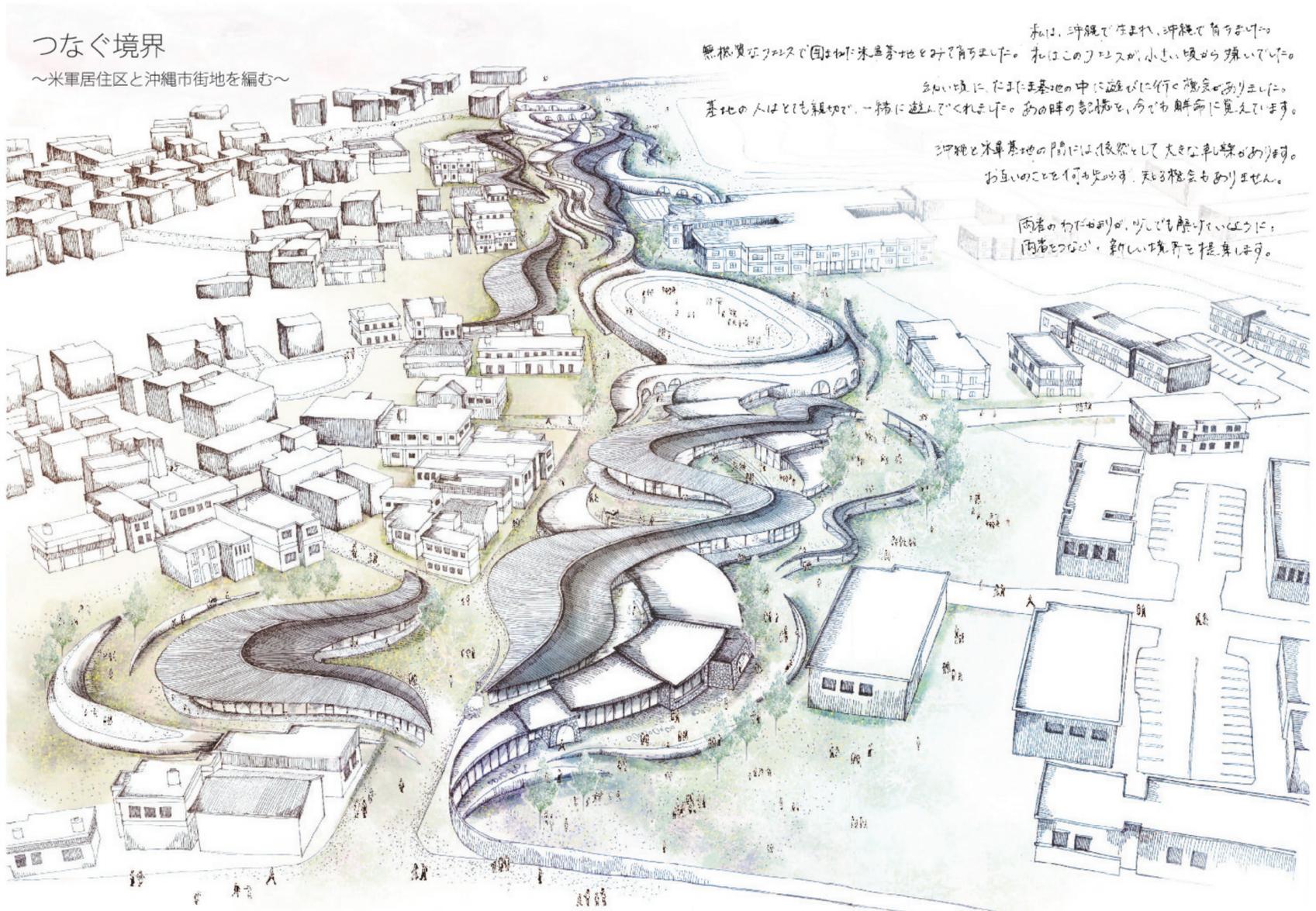
つなぐ境界

—米軍居住区と沖縄市街地を編む—

具志堅美菜子（末包研究室）

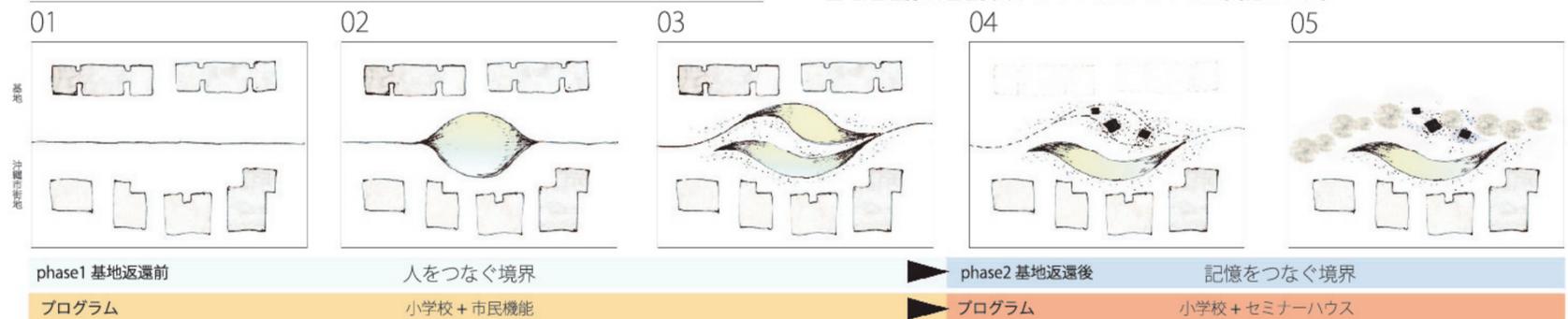
沖縄本島面積の18%を占める米軍基地。実は基地の中には、軍人だけでなく、その家族や子供達も沢山住んでいる。フェンス一枚によって基地と沖縄市街地は明確に区切られ、長年の隣人関係であるにもかかわらず、両者の軋轢は依然として大きい。お互いを知らず、知る機会もない。

両者のわだかまりが、少しでも溶けていくように。後世へそのわだかまりを、残さないために。基地と市街地の関係を再構築する、両者をつなぐ新しい境界を提案する。



ダイアグラム ～良好な共存関係を築くための境界線をつくる～

基地返還前と返還後で、プランとプログラムが変化します。



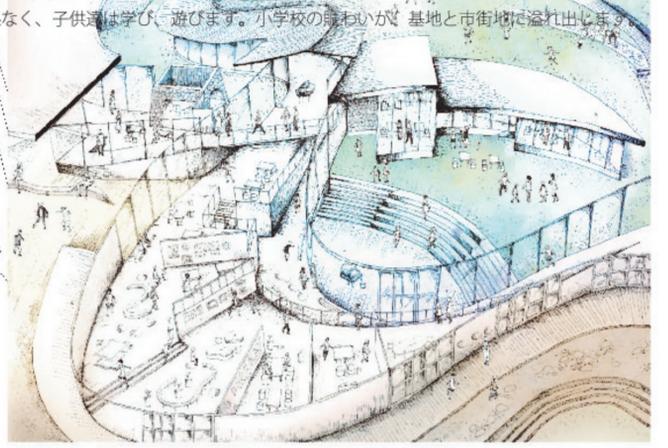
01 既存の基地のフェンスによる境界線。両者を分離し干渉することを許さない。
02 境界線が影らみ、空間を内包する。両者のための、共有する空間ができる。
03 境界を層状化し、空間をレイヤー化する。両者を緩やかに区切り、人をつなぐ。
04 基地返還に伴い、境界の一部は解体され、構造物のみが残る。
05 構造物と成長した草木がかつての境界線を可視化し、記憶をつなぐ



(基地返還前) 基地と市街地を緩やかにつなぎ、緩やかに区切ります。

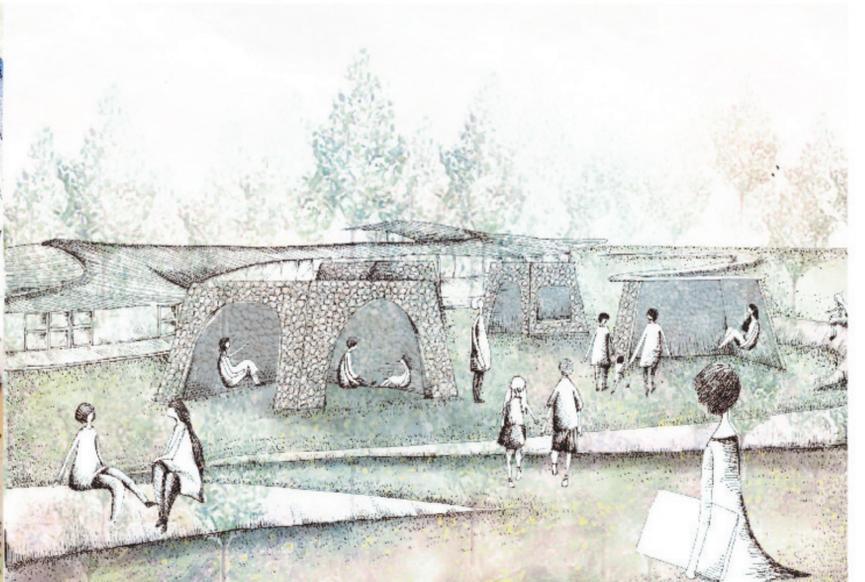


国籍に関係なく、子供達は学び、遊びます。小学校の隣りが、基地と市街地で溢れ出します。



(基地返還後) 境界線の一部は解体され、かつての構造体がのこります。

基地返還前 平面図

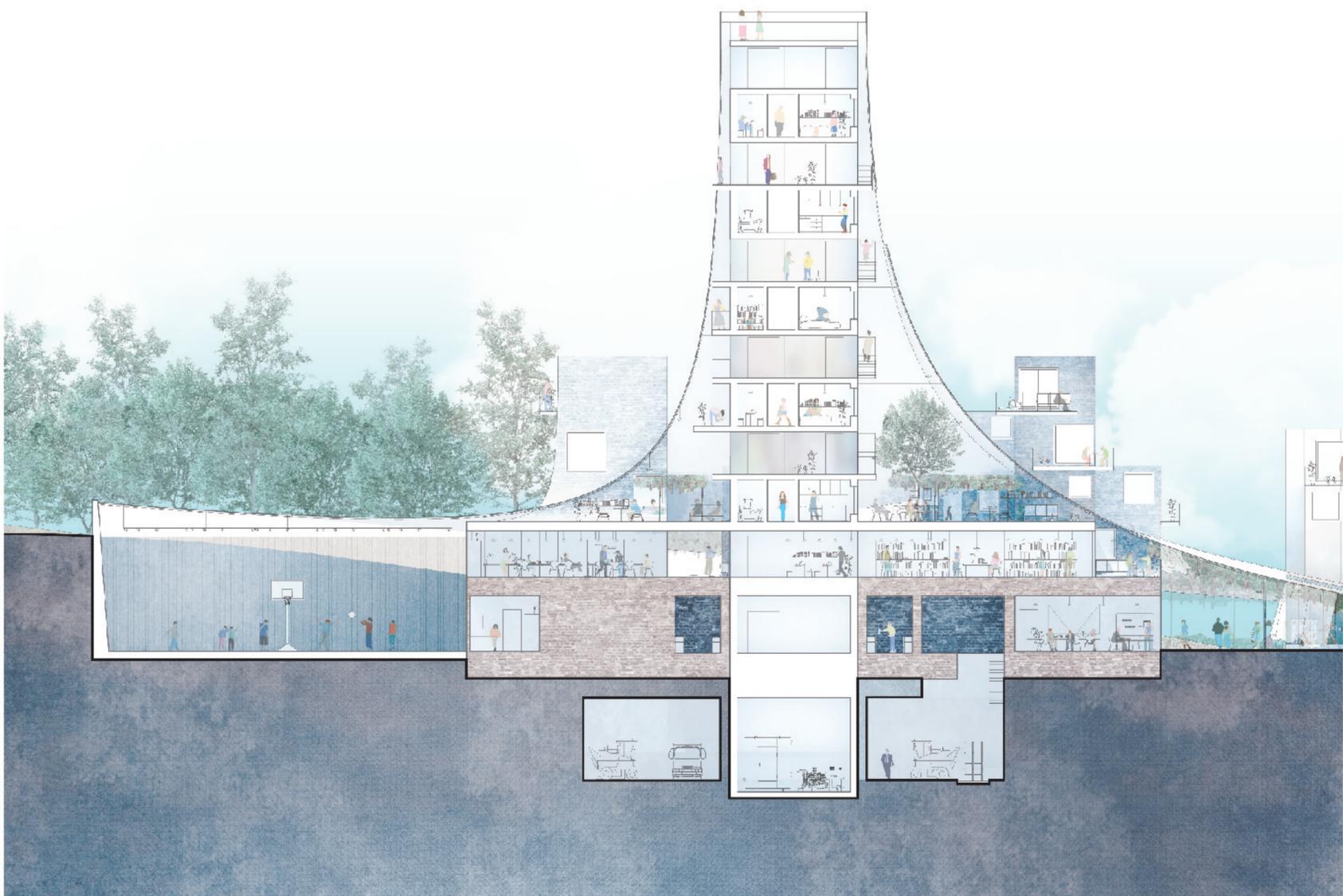


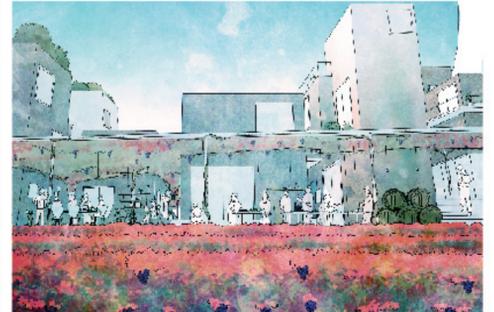
ぶどう荘

越智誠（遠藤研究室）

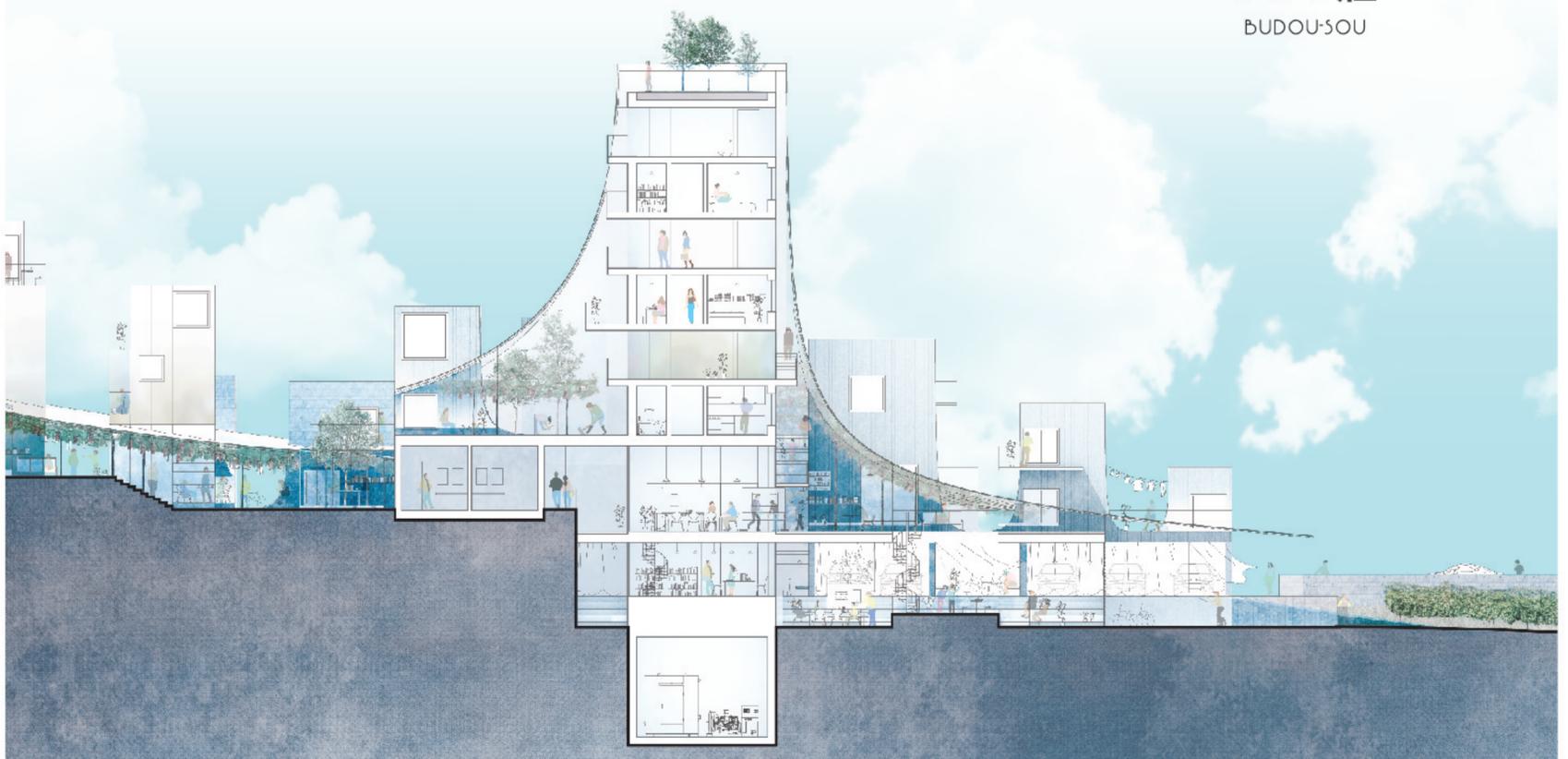
ニュータウン開発によって、街から取り残されたぶどう園。継続する宅地開発による閉園は、地域のアイデンティティ喪失にもなりかねない。一方、ニュータウンのような「大家族」=「一住宅」の図式は最早崩壊し、家族の形は血縁だけに留まらない複数化した緩やかな関係性へと変化していくだろう。

テクノロジーの発達によって仕事形態や農業が激変していくなかで、かつての生活システムであった「ぶどう」という環境を介して人々が繋がり、新しい家族・ライフスタイルを許容する次世代の集住体を提案する。





ぶどう荘
BUDOU-SOU



神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

意想外を生み出す処

—六甲山上空間におけるイノベーション拠点の提案—

大脇春（中江研究室）

世界中で今、大きな変化が起きている。インターネットの普及と「もの」を生み出すテクノロジーの手軽さにより、人々が新たなアイデアを世に送り出すまでの距離がぐっと縮まった。そこで人々がプロを目指し、アイデアをかたちにすることができる日本のメーカーズの拠点を提案する。

美しい自然と多様に変化する環境のもと、作業場や製造室といった拠点を網のように張り巡らせた道の中に構成。創造者たちは、いくんだ道をめぐり世代を越えた人々と交流、そして創造の旅路をここから始めていく。



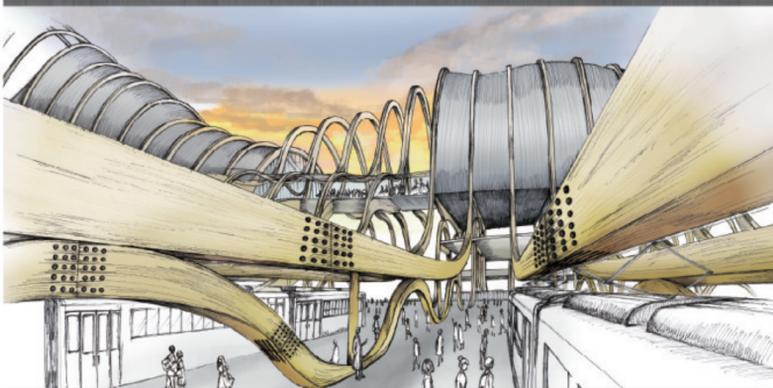
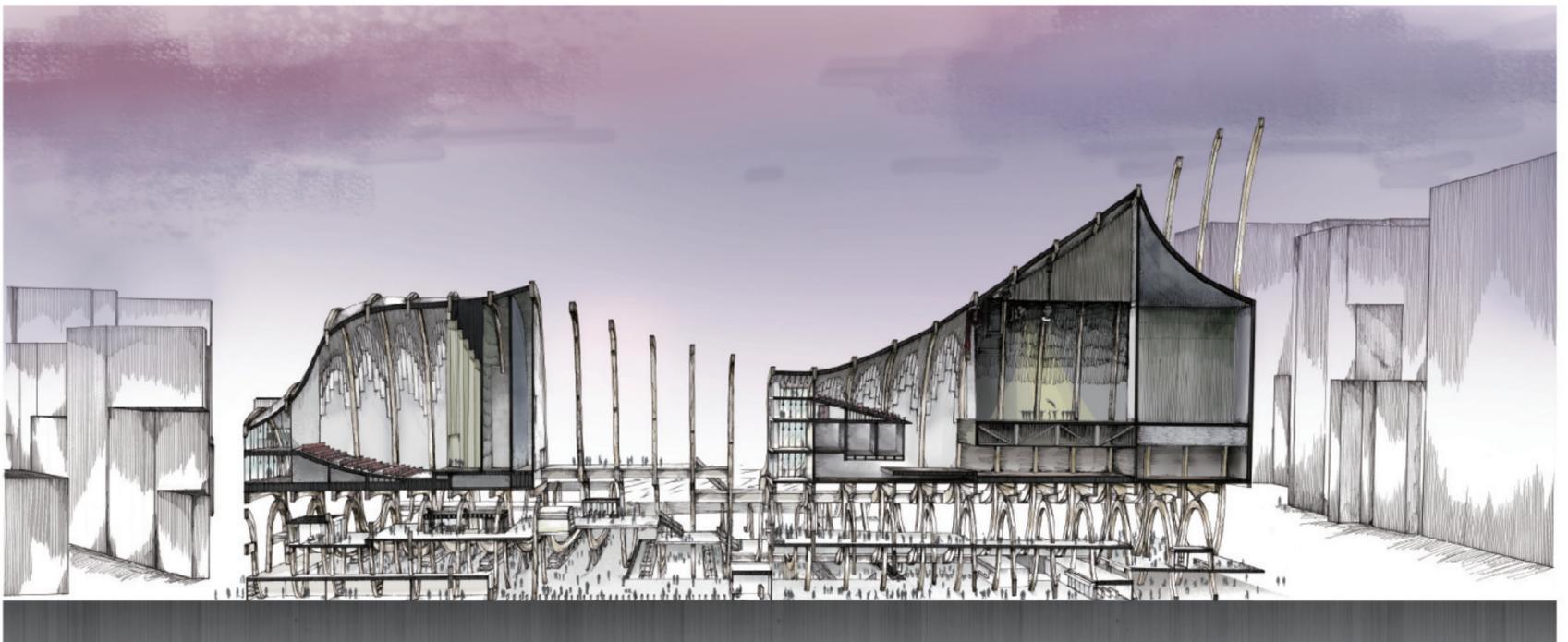
神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

日常から劇場へ
—天王寺における新しい劇場空間の在り方—

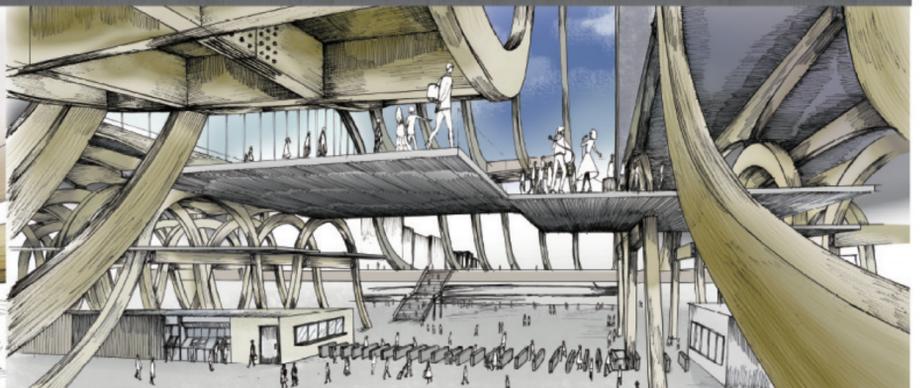
草川望（末包研究室）

私は現代の劇場空間があまりにも閉鎖的で、劇場が好きな人しか集まらない場所となっていることに疑問を抱いた。劇場とは本来人が集まる場所に発生するものであり、劇場空間はもっと日常に即した娯楽であるはずだ。現代の都市の中で、日常空間と共存する新しい劇場空間を大阪府天王寺に提案する。

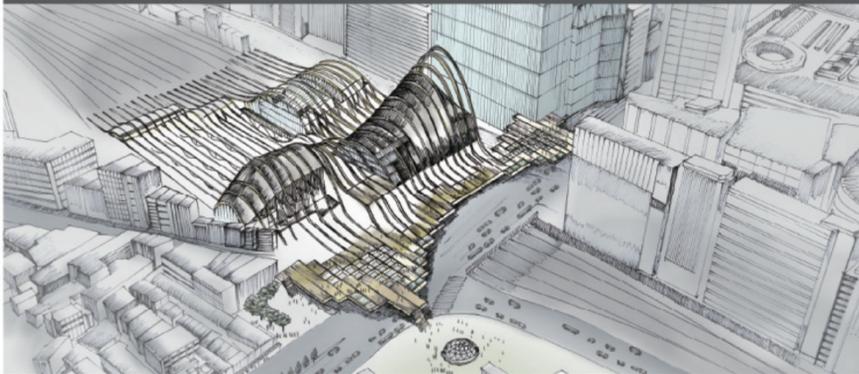
音の波形をメタファーに作られた、柔らかで軽やかな大空間の中に下から、駅、ホワイエ、劇場という垂直のグラデーションをつけ、訪れた人が自然と劇場空間に触れられる場を設計した。



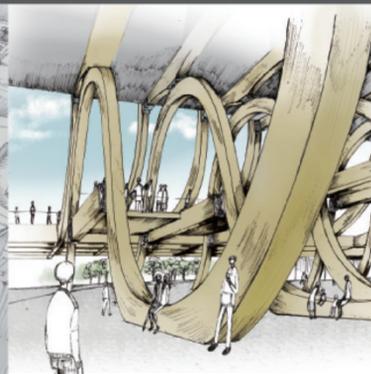
プラットフォームから劇場を見上げる



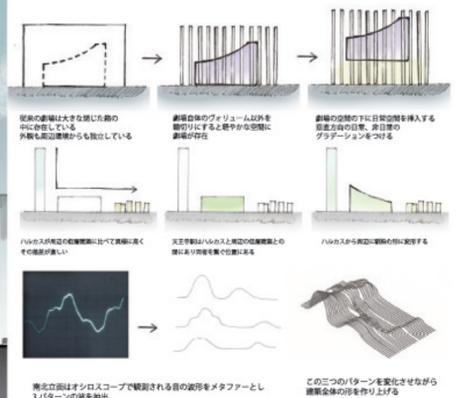
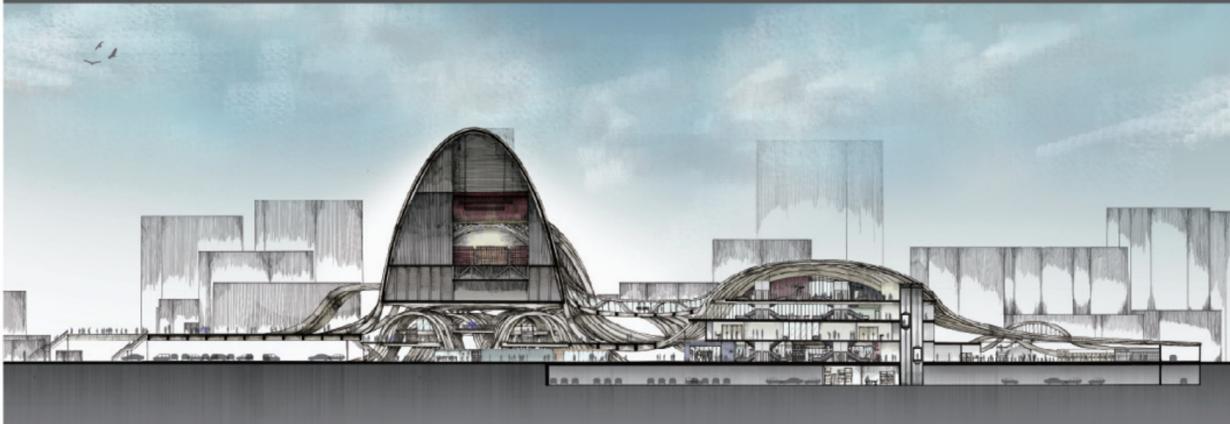
改札口と劇場ホワイエ



大劇場下の空間



ペDESTリアンデッキ



2017年度卒業設計発表会

審査講評

遠藤秀平

神戸大学大学院教授 審査委員長

2017年度の建築卒業設計賞の審査は、2018年2月17日に神戸大学百年記念館六甲ホールで、卒業設計発表会に引き続き公開選考会において実施された。本年度の卒業設計発表作品は29作（併せて中国天津大学留学生の1作も発表された）で、発表会での質疑応答の後、まず、審査員による一次投票を行った。一次投票は、各審査員で4作を選定し上位2作に各2点、他は各1点の重み付けの配点を行った。その結果、佳作以上に相当する賞選考対象作品として11作品が選出された。つぎに11作品について学生による補足説明の後、二次投票として審査員各自で大賞に相応しい1作品に投票を行い、上位4作品を優秀賞以上の受賞候補対象作品とした。この時点で得票数が最も多い越智誠くんの作品を大賞または木南賞の候補作品とした。次に残りの3作を対象としての三次投票を行い、上位2作品を選出した。その後、対象学生からの補足説明と質問を行い、この2作品から大賞または木南賞の候補作品を選ぶ投票を行った。この投票により選ばれた具志堅美菜子さんの作品を大賞または木南賞候補とするとともに、優秀賞候補として、大脇春さん、草川望さんの作品が確定した。

つぎに上位の2作品「ぶどう荘」と「つなぐ境界」について最終の投票を行った結果、1人の票の変動で同位となる僅差で「つなぐ境界」が大賞候補となった。どちらも大賞に相応しい高いレベルの作品でありその成果を讃えたい。

後日、選考会一次投票11作に残った学生から選考手順に対して意見が出され、建築卒業設計賞選考会運営委員会で運営に関して数回議論を行った。その結果、大賞選出にあたって例年行っている挙手による選出が行われていなかったことが判明、これを不備であるとして運営委員会の結論として最終投票を無効として対象の2作を大賞候補とした。その理由は、挙手による選出は運営委員会の運営上の手順とすることを事前に決めて例年実施していたこと、また挙手を行った場合に結果が変わることの可能性を否定できないこと、の2点である。その後、計画系の会議に2作品を大賞とする原案を諮った。会議では最終投票を無効とするほどの不備でないと意見が出され、協議の結果1作品を大賞、もう1作品を木南賞とする案が採択された。

木南賞の越智誠くんの作品「ぶどう荘」は、市街地の郊外にわずかに残る原風景でもあるぶどう畑を近未来の共同体形成の緩やかな核にする魅力的な提案である。AIの登場など働く時間やライフスタイルが多様

化する日本におけるワークアズライフの先駆けでもある意欲作である。ドローイングは物語性を感じさせて引き込む空間の力がある、また小さな単位としての住空間の集住部分やワイン製造や再生エネルギーの提案など総合的な広い視野を持った秀作である。

大賞の具志堅美菜子さんの作品「つなぐ境界—米軍居住区と沖縄市街地を編む—」は、沖縄の基地とそれを取り囲む市街地の融合を時間的経過とともに具体化させる提案である。日本が抱える大きなジレンマでもある基地の問題に正面から向き合った力作であり、特に子供達を巻き込みながら空間的変化が街の質を変える可能性を示している。ただ、返還後も建築により記憶を残すことは理解できるが、未来像としては基地跡への開放性がもう少しあっても良いのではないかと思われる。

優秀賞の大脇春さんの「意想外を生み出す処—六甲山上空間におけるイノベーション拠点の提案—」。六甲山の斜面地に構想された複合オフィス空間であり、特徴は網目のように組み込まれた構造と場の特性が生み出す多様性にある。もう一步を言えば断面計画の繊細さが求められる点にある。

もうひとつの優秀賞、草川望さんの「日常から劇場へ—天王寺における新しい劇場空間の在り方—」。天王寺駅を巻き込む大胆な都市型劇場の提案である。膨大な人の離合集散が繰り返されるこの場所へ、建築形態が持つ力強さによる介入は、保守的な日本の街を変える可能性を有している。しかし、この構造体が木造である必然性はあまり感じられない。

設計作品を評価する指標は多様であり楽しくもあり難しいものである。今回は最終選出において例年の手順を踏まない不備となってしまう、解のない課題へのチャレンジを評価する仕組みへの不断の改変が重要であることを改めて認識することとなった。その結果、混乱を招き関連の記録に齟齬があるとすれば審査員長の責任でありご容赦願いたい。来年の審査にあたっては、公開での意思表示である挙手、また理由なき偏りにより不透明な談合などのような疑いが生まれぬよう、運営委員全員で適切な審査方法に改定することを共有している。筋書きの無い公開審査の運営は簡単ではないが、大学の場が悪しき社会の縮図に陥らず、設計作品への評価を通し学生個人の可能性を最大化する場であること、これが関係者一同の目標であることを再認識したい。

審査委員

遠藤教授を審査委員長とし、選考会選考委員は計画系の全教授6名（遠藤、黒田、末包、北後、三輪、山崎）、准教授4名（大西、近藤、梶橋、中江）、当日全作品の発表を見て頂いた多賀教授と鈴木准教授の2名、ならびに選考会参加を受諾いただいた非常勤講師6名（設計系演習担当：島田陽、竹口健太郎、

光嶋裕介※、小幡剛也、向山雅之、および設計系演習と授業担当の福岡孝則※）の計18名とした。このうち、※の二氏は一次投票のみの参加となり、選考会は16名で行われた。次年度非常勤講師（予定）の吉武宗平氏にオブザーバーとして参加していただいた。

得票数一覧

氏名	卒業設計 題目	1回目	2回目	3回目	4回目	最終結果
越智 誠	ぶどう荘	6			7	木南賞
具志堅 美菜子	つなぐ境界—米軍居住区と沖縄市街地を編む—	3	7	10	9	大賞
大脇 春	意想外を生み出す処—六甲山上空間におけるイノベーション拠点の提案—	4	6	6		優秀賞
草川 望	日常から劇場へ—天王寺における新しい劇場空間の在り方—	2	3			優秀賞
野田 杏菜	こどもり—まちと自然が綯い交じる、子どものための空間—	1				佳作
大西 玲	瀬と淵—人とまちを繋ぐ水辺空間の提案—					佳作
竹田 理紗	海に刻む—明石を再認識する交流拠点—					佳作
羽柴 優	生業の坂—京都清水・観光と暮らしの共存のために—					佳作
長谷川 貴士	ときの削壁—月ヶ瀬採石場における違法掘削崖の環境再生案—					佳作
前田 洋佑	アグロメケンチク—都市空間をつなぐ新しい複合施設の提案—					佳作
米倉 良輔	都市の潜窟					佳作

神戸大学建築卒業設計賞 佳作

瀬と淵

一人とまちを繋ぐ水辺空間の提案

大西玲（槻橋研究室）

かつて大坂の人々の生活を支えた水辺は、現在都市の縁となっている。そこで、川がまちの中心であった風景を蘇らせ、現在大阪にある「都市的な水都」ではなく、「生活に根ざす水都」の拠点となる水辺空間を提案する。川の流れて沿って水を取り込み、水が流れる「瀬」と水が溜まる「淵」をもとに空間を構成し、人や船の動線と水の流れを絡み合わせ、多様な生活シーンを作り出す。この場所を拠点として人やまちが繋がることで、人々の生活の中心となる港のような空間が生まれる。



海に刻む

—明石を再認識する交流拠点—

竹田理紗（末包研究室）

明石では、文化を育んできた港と市民の生活が切り離され、どこかでみたことのあるような光景ばかりが広がっている。明石淡路フェリー乗り場の跡地において、建築によって土地の特性を顕在化させ、人とまちを結ぶ場を提案する。この場所が持つ海への関係性を二つの屋根によって表し、その勾配や方向性によって、明石の様々な表情を体感できる空間をつくり出す。この場を訪れることで、人々は明石の魅力を再認識し、人との交流が広がる中で、まちへの愛着が生まれていく。



こどもり

—まちと自然が縋い交じる、子どものための空間—

野田杏菜（三輪研究室）

わたしの幼少期を思い返すといつも身近なところに自然やまちの人の存在があった。特に自然の中で過ごした時間は驚きと感動に満ちた豊かでかけがえのない時間であったように感じる。しかし現代の子どもたちは室内で完結した空間で過ごすことが一般化されてしまい、まちや自然とふれあえる場が子どもたちのまわりから減ってきてしまった。そこで、まちと自然が縋い交じるような新しい子ども園を提案する。



生業の坂

—京都清水・観光と暮らしの共存のために—

羽柴優（山崎研究室）

観光客の増加、彼らの「古都・京都」への眼差しは地域構造に大きな影響を与えている。観光向けの施設が拡大し、住民の生活環境は変質し住民が抜けていき、持続してきた地域の文化は失われつつある。年間5500万人の訪れを受け入れつつ、地域性をどう受け継ぐか。そこに住まう人の文化と技術を提示することが必要だ。京都最大の観光地・清水に、伝統的な街の佇まいに接続しながら、清水焼という地域固有の文化と技術を通じて観光と生活が共存し発展するための新たな坂を提案する。



神戸大学建築卒業設計賞 佳作

ときの削壁

一月ヶ瀬採石場における違法掘削崖の環境再生案

長谷川貴士（槻橋研究室）

月ヶ瀬採石場のときが止まった。指定範囲外への違法掘削により隣接する茶畑ギリギリの崖が形成され、採石中止、原状回復是正案が出されたが、現在は放置されている。そこで採石場の自然を再生するための研究・教育施設を提案する。森林の再生を促進し、再生する過程を観察・研究することで、採石場の傷跡を癒すとともに、本来あった自然よりも多様性のある生態系を再構築する。建築を通して失われた自然が再生し、止まってしまったときを次の形へと進めることを目標とする。

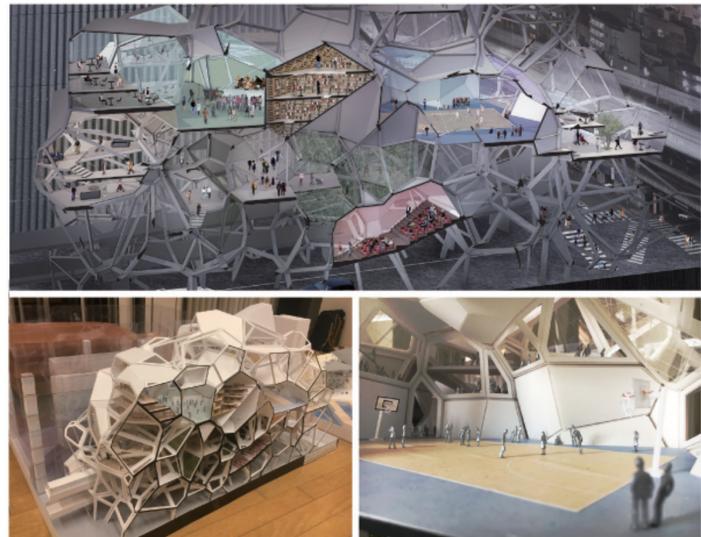


アグロメケンチク

都市空間をつなぐ新しい複合施設の提案

前田洋佑（槻橋研究室）

現在の都市を構成する建築群は、効率を求めた高層化によって均質空間を持ち、どこか切り離されたように感じる。そこで空中を舞台に既存建築をつなぎ合わせる建築を提案する。「アグロメ」とはプログラムの集積を表し、3Dボロノイを用いた空間に様々な要素を立体的に配置していく。ボロノイがもつ不均一な空間の重なりや連続性、建築空間として利用するための動線計画やプログラムの配置を考えることで、この建築が切り離された都市空間をつなぐ新たな骨格となる。



都市の潜窟

米倉良輔（遠藤研究室）

有事の際に私たちの身を守る「核シェルター」。日本のその普及率は0.02%と著しく低い。欧米でも維持管理、治安といった面で正しく機能しているとは言い切れない。昨今の国家間の緊張や放射能処理等、その重要性が再認識されはじめている今、日常における非常時施設の在り方が問われているのではないだろうか。内外の反転が施された地下空間に複数のプログラムを配置し、それらの転用によって成立する自己完結型の公共シェルターを、都市に対する啓蒙施設として提案する。



卒業設計発表会の様子



神戸大学卒業設計 作品紹介

陶冶の郷

穴井 万智 (中江研究室)



ソトボリを辿る

牧 拓志 (高田研究室)



次世代カーステーション

青山 貴哉 (北後研究室)



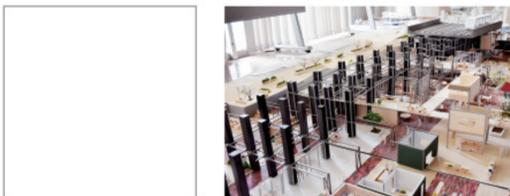
路の記憶

一枚方宿場町における町家を内包した集合住宅—
井上 堯大 (三輪・栗山研究室)



融けだすウラロジ

高架下を起点とした元町再編計画—
井上 凌成 (山邊研究室)



大阪・南惣構堀再生計画

一街の立体廻遊型ミュージアム—
越智 友祐 (山崎・山口研究室)



日の目を見たよごれ役

一廃下水処理施設のパブリックスペースへの転換—
桂 麟太郎 (黒田研究室)



緑道の屋根

一泉北ニュータウンにおける市民活動のための公共屋根空間—
小漣 航 (大西研究室)



逢着の帯

一豊田市保見団地・多文化多世代を紡ぐ散策空間—
小林 純 (山崎・山口研究室)



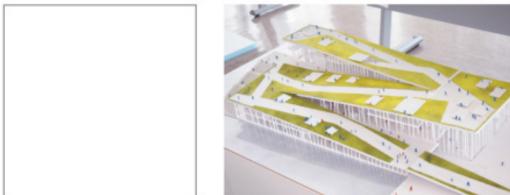
都市の回廊

一見えていける あると分かる—
五藤 亮太 (鈴木研究室)



水都へ

一大阪における客船ターミナルの再生—
更谷 健佑 (黒田研究室)



祭り結ぶ

一坂越における仮設部材により変化する空間の提案—
田中 里奈 (三輪・栗山研究室)



めぐりめぐる

一奈良県大和郡山城跡におけるサードプレイスの提案—
西村 友佑 (三輪・栗山研究室)



廻縁

花嶋 勇哉 (遠藤研究室)



どこそこの、だれそれと。

一随意的コミュニティを有する集住体—
羽山 華望 (中江研究室)



人通りに渦

一北野坂における往来と滞留—
宮田 舞子 (黒田研究室)



都市のポリフォニー

一人の活動の重層による賑わい空間の提案—
村上 遼 (槻橋研究室)



まちをつなぐ場所

安福 将吾 (北後研究室)



Community Cultural Station

一地域に開かれた小学校とコミュニティセンターの融合—
Zhang Qiyan (天津大学、三輪・栗山研究室)



2017 年度卒業設計発表会

作品講評

大賞

つなぐ境界 — 米軍居住区と沖縄市街地を編む —
具志堅美菜子（末包研究室）



建築には、できることと、できないことがある。特に、卒業設計のテーマを見極めるための私なりの指標である。具志堅さんとの対話は、まさに、そこから始まった。米軍の居住区と一枚のフェンスで隔てられた沖縄の市街地。交流という名の下、様々なイベントなどが行われているが、それにも限界がある。このフェンスを建築化して新たな交流のための施設とすべく提案したいという具志堅さんが、最も意を配したのは、あるいは、配さざるを得なかったのは、完全な交流も具現化できなければ、全く交流のない状態というのも想定されないであろうという中で、交流のあり方やその将来像であった。人を隔てていたフェンスが、湾曲し、日米双方の空間に侵食し、その中に、小学校とコミュニティ施設が、空間ごとに階層化され、機能的な独自性を保持しつつも、空間的には相互に貫入する。それにより、日々の生活をともにする日米の小学生の姿を、大人たちは「開口」ごしではあっても様々に用意された空間から垣間みる。さらに、その姿は仮に基地返還がなされたら、境界線としての役割を終えたこの「フェンス」は、構造体のみが残り、その存在の記憶を留める装置として機能する。極めて政治的で、建築的には解決しにくい課題に果敢に取り組み、建築空間として昇華させた執拗なスタディと勇気に賛辞をおくりたい。

審査委員 末包伸吾

優秀賞

意想外を生み出す処 — 六甲山上空間におけるイノベーション拠点の提案 —
大脇春（中江研究室）



六甲山の斜面地に網目のように組み込まれた建築によって、世界各地で勃興するメーカーズムーブメントの拠点を山中に作るものだ。道を編み込んだような構造によって意想外の出会を作り出す設計は粘菌のコロニーのようでもあり、新鮮でよく練られていた。ただ、会議室などの幾つかの異質なボリュームの扱いについては疑問がある。また、設計されている様々なシーンについて、よりリアリティを持って印象深く描き切れればなお良かった。

審査委員 島田陽

木南賞

ぶどう荘
越智誠（遠藤研究室）



大正時代から続く「ぶどう園」が点在している原風景をトリガーに、「ぶどうづくり」という行為を介し、新たなつながり—緩やかな家族同士の関係性—を生み出そうという、意欲的な提案である。

ぶどう畑を ETFE 膜の軒下空間とし、そこを共有しながら、その境界面の内外で、公と私のゆるやかな「しきい」を成立させて、もしかしたらあるかもしれないような世界をポエティックに描き出している。

目の付け所とそのソリューション、そして表現のバランスが秀逸である。

審査委員 小幡剛也

優秀賞

日常から劇場へ — 天王寺における新しい劇場空間の在り方 —
草川望（末包研究室）



合理性を拠り所として論理的に最適解に近づこうとするエンジニアにとって、“建築家の感性”を共有することはなかなか難しいものである。それでも、彼（彼女）なりの主張を常識の範囲で理解でき、なによりも心からの熱い思いを感じることができれば「なんとかして実現しよう！」となる。草川さんのダイナミックな提案は、学生らしく粗削りなコンセプトに基づくものであるが、エンジニアをそんな気持ちにさせてくれる作品であった。

審査委員 多賀謙蔵